関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

鎌倉文庫刊『ヨーロッパ』総目次（1947年5月・第1巻第1号～1948年12月・第2巻第9号）

その他のタイトル	The Total Contents of Magazine Europe Published by Kamakura-Bunko
著者	辻 秀平
雑誌名	千里山文學論集
巻	102
ページ	33-52
発行年	2022-03-01
URL	http://doi.org/10.32286/00026089

〔文献索引〕

鎌倉文庫刊『ヨーロッパ』総目次

（1947年５月・第１巻第１号～1948年12月・第２巻第９号）

辻　　秀　平

1. 鎌倉文庫の概要・鎌倉文庫関係目録類の現況

1945（昭和20）年８月のアジア太平洋戦争の敗戦と、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）による占領統治の開始に伴い、日本は戦前の軍国主義的な国家観を180度転換させた「文化国家」という新たな国是の下で、民主化の道を歩み始めるようになった。

1946（昭和21）年には、戦時下で弾圧によって廃刊を余儀なくされていた『中央公論』（中央公論社刊）と『改造』（改造社刊）が相次いで復刊し、『世界』（岩波書店刊）や『展望』（筑摩書房刊）といった新しい総合雑誌も創刊されるようになった。また、文芸雑誌や婦人雑誌などの様々な雑誌も数多く創刊・復刊されるようになり、新興出版社が数多く登場し、これによって出版界は息を吹き返した。その中には「カストリ雑誌」と称されるような、性風俗や猟奇犯罪への興味本位の娯楽雑誌も“雨後の筍”のように登場しており、占領期の日本の出版界は混沌とした様相を呈していた。

こうした占領期の新興出版社の一つに、鎌倉文庫がある。敗戦の翌月から、経営難に陥り倒産するに至った1949（昭和24）年10月までの約４年という限られた期間ながら、数多くの単行本や、文芸雑誌の『人間』、『文藝往来』、『ヨーロッパ』、婦人雑誌の『婦人文庫』、総合雑誌の『社會』という５種類の雑誌を刊行していたことで知られている。こうした出版社鎌倉文庫の前身となったのは、戦争末期に神奈川県鎌倉市で創業された貸本店鎌倉文庫であった。

1945（昭和20）年５月１日、当時鎌倉一帯に居住していた久米正雄や川端康成、高見順、大佛次郎、永井龍男、林房雄といったいわゆる“鎌倉文士”の文学者たちが、各々の蔵書を持ち寄って、鎌倉市八幡通りの玩具店を借り受け、貸本店鎌倉文庫を開いた。この貸本屋は、戦時下で経済的苦境に喘いでいた文学者たちへの経済的援助を目的とするという実際的なものだった。だが、戦時下という「書物の飢餓時」[1]に多くの書物に触れる機会を人々に提供したという点で、その文化史的意義は大きいものであったと言える。

同人の一人であった川端は、貸本店鎌倉文庫の営為を以下のように述べている。

> 鎌倉文庫は戦争中の五月に開設した。私共が店番をし、手車やリユツク・サツクで本を運搬するのを見て、阿呆らしいこと、勿体ないことといつてくれた人もあつたが、これで食ふんだものなんでもないと私は答へた。事実であつた。昨年度の私の原稿料は八百円代、印税はなく、従つて今年は総合所得税を払つてゐない。食ふためのと端的に答へたのも偽りでなかつた。しかし文学者の仕事としての貸本店であつたことも無論である。発表も発行も抑圧されてゐた文学作品も、貸本として読まれることは禁止されてはゐなかつた。小さい店に過ぎないが、千名二千名の会員を擁し、幾万の人々に文学を与へて来たのである[2]。

敗戦直後の８月下旬、貸本店鎌倉文庫に大同製紙の重役が出版社創業の企画を持ち込んだ。その際の様子を高見は以下のように回顧している。

> この月の下旬に、Ｄ製紙会社の重役から、「鎌倉文庫」と提携して出版会社をはじめたいといふ話が久米正雄のところへ持ち込まれた。「鎌倉文庫」の前を偶然、その重役が通りかかると、ぐうたらの筈の文士が、せつせと貸本業にいそしんでゐる。それを見て、かういふ文士となら一緒に仕事ができると思つた。久米正雄にさういつたと私は

聞かされて、苦笑した[3]。

出版社創業の企画は進み、取締役に久米、重役に川端、高見、中山義秀が就くという会社の見取り図が定まった。やがて鎌倉文庫は貸本店から出版社へと装いを新たにし、翌９月に新会社が設立されたのである。

新生・鎌倉文庫は1946（昭和21）年１月に、久米の提唱で文芸雑誌『人間』を創刊した。これは大正期に久米や里見弴、吉井勇、直木三十五らが発刊した雑誌名を踏襲したものであり、鎌倉文庫は『人間』の創刊によって読書界の注目を浴びるようになった。『人間』の編集長だった木村徳三は、「意識的に若い作家を集めて、文学エネルギーの発散場所にしたかったんです」[4]と後年回顧しているが、この言葉の通り『人間』の執筆陣には新進作家が多く名を連ねている。当時無名だった三島由紀夫は、川端の後押しで『人間』に短篇「煙草」（1946年６月号）を発表して文壇デビューを飾った。この他にも織田作之助が「世相」（同年４月号）を、武田泰淳が「才子佳人」（同年７月号）を発表しており、『人間』は戦後派作家の初発期の活動の場となったのである。

鎌倉文庫の収益は当初好調であり、婦人雑誌『婦人文庫』（1946年５月創刊）、総合雑誌『社會』（同年９月創刊）、文芸雑誌『ヨーロッパ』（1947年５月創刊）の３誌を次々と創刊するに至った。だが、戦前からある老舗の出版社が勢いを取り戻す中で、鎌倉文庫は次第に経営を悪化させるようになり、こうした後発の雑誌は経営上の重荷になっていった。鎌倉文庫の編集者であった巌谷大四は、経営が悪化の一途を辿っていた1948（昭和23）年当時の鎌倉文庫について、以下のように回顧している。

> 昭和二十三年の秋、既に鎌倉文庫では、『人間』（編集長木村徳三氏――現在教育テレビ勤務）、『社会』（編集長大森直道氏――現在 TBS 取締役総務局長）、『婦人文庫』（編集長若槻繁氏――現「にんじん・くらぶ」会長）、『ヨーロッパ』（編集長鍛代利通氏）の四つの雑誌が出ていたが、『人間』はともかくとして他は殆ど赤字状態だった。出版物も出せばそれだけ損をするという状態で、結局、文学志望者と作

家とむすびついた、戦前の『文章倶楽部』を一層ひろげたような雑誌を出そうということになり、その編集長として私に白羽の矢が立った[5)]。

鎌倉文庫が経営悪化の打開策として、「文学志望者と作家とむすびついた」文芸雑誌の『文藝往来』を創刊したのは1949（昭和24）年１月のことだったが、創刊から１年も経たない同年10月に廃刊（全９号）となった。『婦人文庫』、『社會』、『ヨーロッパ』の３誌も、『文藝往来』の創刊に前後して廃刊に追い込まれた。鎌倉文庫は看板雑誌『人間』の延命を図ろうとするも叶わず、発行を目黒書店に譲った上で同年10月に経営破綻した。

僅か４年足らずで活動の幕を下ろした出版社鎌倉文庫は、GHQ/SCAP占領下の出版界で存在感を放ち、多くの文学者を引き寄せていた。戦後の文学史や出版史、メディア文化史、言論史などを考える上で鎌倉文庫の果たした役割は特筆に値するものがあるが、その研究は進んでおらず、課題が多く残されている。研究の基礎となる目録データ類についても、未だ十分に整理されていない。

鎌倉文庫の出版物のうち今日確認できる目録類は、単行本関係が1992（平成４）年に『人間』の復刻版が刊行された際に作成された目録[6)]と、2000（平成12）年に土屋定夫が作成した目録[7)]がある。直近では2021（令和３）年に尾崎名津子が単行本の新たな目録[8)]を発表しており、単行本に関しては逐次目録データが更新されている状況にある。

また雑誌については、『人間』[9)]、『文藝往来』[10)]の２誌の総目次が既に作成されており、国立国会図書館デジタルコレクションでも『人間』と『文藝往来』については全ての巻号、『婦人文庫』は大半の巻号の目次が閲覧できる状況にある。だが管見の限り、『ヨーロッパ』と『社會』の目録類は未だ作成されていない。

そこで本稿では、出版社鎌倉文庫の実態解明のための基礎的作業として、まず『ヨーロッパ』全14号の総目次を作成した。『社會』全30号の総目次については、稿を改めて発表する予定である。

2. 文芸雑誌『ヨーロッパ』について

『ヨーロッパ』は、1947（昭和22）年５月（第１巻第１号）から、翌1948（昭和23）年12月（第２巻第９号）にかけて、延べ14号に渡り発行された月刊文芸雑誌である。終刊まで一貫して A5 版で発行されており、印刷は凸版印刷株式会社、配給は日本出版配給株式会社が担っていた。『ヨーロッパ』の特色は、海外、特にフランスの文化や文学の動向の紹介と、文学作品の翻訳に重点を置いていた点である。創刊号（第１巻第１号）末尾の「編集後記」の前半部を以下に引く。

> 出版界全体が未曾有の重大危機に突入してゐる現在、山積する悪条件を排除して、この「ヨーロッパ」を創刊出来たことを読者諸氏と共によろこびたい。
>
> わが国が敗戦の結果直面してゐる孤立は単に政治、経済の面のみに止まらず、文化の面に於ても亦然りである。小社は文化国家樹立と云ふ国家緊急の要請に応へ広く世界の知識人から稿を得て、国策遂行への一助にしたいと考へて構想をねつてゐた。
>
> 発行部数が僅少なのは遺憾の至りである。
>
> 「サルトルの哲学」のテツセエ氏　E. Theysset は仏蘭西グルノーブル大学哲学科出身の新鋭で、駐日仏蘭西国代表団の一員として目下活躍中である。誌上をかりて厚く御礼申上げる次第である[11)]。

この「編集後記」では他に、次号（第１巻第２号）の記事の予告とともに、掲載記事がフランス・パリに本社を置くフランス通信社（AFP 通信社、Agence France-Presse）の提供と、直接寄稿のものから成っていることにも言及されている。

『ヨーロッパ』が標榜した使命は、日本が「敗戦の結果直面」せざるを得なくなった文化面での孤立状態を打破し、海外から文化を取り入れるための“橋渡し役”になることであった。日本の文化面の孤立は単に敗戦に

よるものだけではなく、冷戦構造の深化によって目まぐるしく変化していた当時の国際情勢も大きく作用していた。『ヨーロッパ』の掲げた使命の背景には、こうした同時代のポリティクスが垣間見えるのである。

鎌倉文庫の重役だった川端は、『ヨーロッパ』について以下のように述べている。

> 鎌倉文庫で「ヨーロツパ」といふ雑誌を出した。フランス通信と特約によつて原稿の提供を受け、その翻訳文ばかりの月刊雑誌であつた。そのころはまだヨオロツパの雑誌などは手に入らないし、版権もとざされてゐたので、「ヨーロツパ」は小さい窓の役目をつとめた[12]。

川端が占領下で「ヨオロツパの雑誌などは手に入らないし、版権もとざされてゐた」と述べるように、当時 GHQ/SCAP は占領政策の一環として、海外著作物の日本への輸入や、版権の取得に制限を課していた。1947（昭和22）年１月に GHQ/SCAP 情報部より外務省および終戦連絡中央事務局宛に出された「連合国軍最高司令部よりの、出版物、映画、写真及びニュースの輸入等に関する回状の件」（総司令部回状第十二号）[13]では、海外著作物の規制に関する方針が示されている。例えば「図書」の項目の一部を見ると、

> ㈡　図書
>
> ㈠　外国出版業者は日本に於いて図書、パンフレット、及び之と類似の発行物を出版することは許可されない。
>
> ㈺　日本人一般に販売するため外国に於て印刷された書物の輸入は当司令部の許可を要する。

とある。またこれに附された「別紙　二」では、「外国にある版権の翻訳権及翻刻権及刊行権の日本における譲渡に関する規定」が掲げられている。その一部を抜粋すると、

> ㈢　出版業者及版権所有者の被許可一国単位団体は何れも特種の書籍

を、それが明かに占領目的に副うものである限り、日本出版業者に対し翻訳によりあるいは原国語によるの如何を問わず出版することを勧奨し得る。

(七) 当司令部は、外国出版諸団体に対し、占領目的に副うと信ずる特種図書の翻訳権、翻刻権の提供を要求し得る。

(八) 紙のろう費を防ぐため、現占領目的の促進に対し積極的に資するところはないか、別に反するところ無き図書は、何れの国のものを問わず、現占領目的に積極的に資するところある図書と取組ませるを要する。

というように定められており、「占領目的」に適うと見做された海外著作物に限って、版権の譲渡・取得が認められていたことが分かる。

こうした規制の背後には、冷戦構造の深化による国際情勢の変化があった。宮田昇は『翻訳権の戦後史』（みすず書房、1999年2月）で、GHQ/SCAP による版権統制を論じる際、前掲の総司令部回状第十二号の意義について、

> 連合国軍とはいうものの真の占領軍であるアメリカ側（GHQ）としては、冷戦の相手として意識し始めたソ連だけでなく、友好国である他の連合国に対しても主導権を持ち、自国に有利な文化政策を打ち出す必要があった。それが総司令部回状十二号が出された理由である[14]。

と指摘している。この指摘にあるように、GHQ/SCAP の主導権を握り占領政策を実際に推進していたのはアメリカであった。アメリカは台頭するソ連を中心とした東側共産主義陣営を念頭に置き、またイギリスやオーストラリア、カナダといったイギリス連邦諸国や、フランスといった他の GHQ/SCAP 構成国も意識しながら、諸外国の日本への政治・文化的プレゼンスの抑止を目的として、海外著作物の輸入や、版権の譲渡に対する規制を設けたとされる。川端の「ヨオロツパの雑誌などは手に入らないし、版権もとざされてゐた」という言及の背後には、著作物や版権を取り巻く

冷戦初期の国際情勢の変化があったのだ。

ここで話題を『ヨーロッパ』に戻すが、この雑誌については従来、「世を挙げてアメリカに憧れの目を向けるなかにあって「ヨーロッパ」に直接触れようとした企画はユニークなねらいであった」[15]とか、「敗戦日本が米軍を主体とする連合軍の占領下にあって、急速にアメリカ文化の洗礼を受けつつあったとき、これに反撥して伝統あるヨーロッパ文化の紹介につとめた」[16]というような、肯定的な評価がなされてきた。確かに、フランスの文化や文学の動向の紹介と、文学作品の翻訳に重点を置いた『ヨーロッパ』は、アメリカニズムへの傾倒を強めていた占領下の日本にあって、フランスの芸術や文化への憧憬という戦前的教養知を継承・再現するようなものとしての価値が認められよう。だがここにも、冷戦初期のポリティクスが見え隠れしていることを考慮しなければならない。

前述の通り『ヨーロッパ』の記事は、フランス通信社（AFP 通信社）の提供によるものが主体であったが、当時フランス通信社はナチス・ドイツの占領から解放されたばかりの第四共和政フランスの「国有」通信社であった[17]。つまり、フランス通信社の提供記事にはフランス政府の意向が少なからず反映されている可能性を否定できず、フランス通信社による『ヨーロッパ』への記事提供という行為が、日本に対するフランスの政治・文化的プレゼンスの向上という性質をある程度帯びていることが想定されるのである。『ヨーロッパ』の創刊号末尾の「編集後記」の中で、「J・P・サルトルの哲学」の記事を著した「テツセエ氏」が「駐日仏蘭西国代表団の一員」、すなわちフランス政府関係者であると紹介されている点は注意を引く。この他に、例えばビア・レッドマンの「大戦中の英国におけるフランスの文化活動」（第１巻第３・４合併号）や、ピェール・マンデス・フランスの「解放戦ルポルタージュ　自由フランスのために！」（第１巻第５号）のような記事は、上述した問題点を考慮する上で様々な論点を提起するものとなろう。

また『ヨーロッパ』創刊号では表紙を藤田嗣治（レオナール・フジタ）が担当し、小松清や今日出海、堀口大學などが手掛けた邦訳の記事が掲載

されている。フランスに理解のある日本の作家や芸術家、学者、文化人を介した言説によって誌面が仕立てられる傾向は『ヨーロッパ』の終刊まで一貫しているが、こうした人々の言説が文化の“橋渡し役”としての務めを果たしたのと同時に、GHQ/SCAP 占領下のポリティクスとそれに囲繞された『ヨーロッパ』という言説空間の性質を考慮すれば、意図せず外国政府の文化政策の“担い手”や“媒介”となった可能性が拭い去れない。「発行部数が僅少」（前掲、「編集後記」）であっても、こうした問題は等閑視されるべきではないだろう。

『ヨーロッパ』は、GHQ/SCAP 占領下日本の芸術文化の動向や、海外との文化交渉の様相を垣間見ることの出来る点で、その文化史的意義を認めることが出来る。これと併せて、雑誌の言説空間を取り巻くGHQ/SCAP 占領下の文化統制や政治状況を考慮しながら、今後その存在意義が明らかにされる必要があるだろう。こうした『ヨーロッパ』の諸問題については、いずれ機会を改めて検討したい。

3. 文芸雑誌『ヨーロッパ』総目次

【刊行期間】 1947（昭和22）年５月～1948（昭和23）年12月（全14号）
【誌　　名】『ヨーロッパ』“Europe”
【発 行 所】 株式会社鎌倉文庫
【印 刷 所】 凸版印刷株式会社
【配 給 元】 日本出版配給株式会社
【刊行頻度】 毎月１回・１日発行（※合併号あり）
【判　　型】 A5判

■第１巻第１号 ¦創刊號¦（昭和22年５月１日発行、定価15円）
編集人――鍛代利通
発行人――岡沢一夫
印刷人――楠末治
表紙――藤田嗣治

- E・テッセエ（小松清訳）「J・P・サルトルの哲学」……2
- アンドレ・ジイド（山内義雄訳）「マラルメの教訓」……21～24
- （※無署名）「無政府主義の司祭プレヤード賞を受く」……21～24
- ロオラン・メルラン（今日出海訳）「フランス近代音楽は死滅したか―モオリス・ラヴェルの偉大なる沈黙―」……25
- J・クヴァル（岡田眞吉訳）「ルネ・クレェル論」……33～36
- ジヤン・テデスコ（岡田眞吉訳）「シナリオの進化」……33～36
- ピエエル・サンダァル（堀口大學訳）「詩人にして空中曲芸家　画家　バレ作者　拳闘愛護家　劇作者たる　ジヤン・コクトオ「仙女物語」を映画化」……37～45
- G・マルセル（佐藤朔訳）「久しぶりのジュウル・ロマン」……37～45
- カール・レンナー（大岩誠訳）「マルクス学説と労資問題」……46
- O・K「カフカ文学焚書論／「詩人のほまれ」と「詩人のけがれ」／封印列車から飛びおりた俳優／「青春と死のたわむれ」」……52
- アンドレ・ジイド（渡邊一夫訳）「フランスの御用文学―モリス・バレース―」……58

• （※無署名）「編集後記」……64

■第１巻第２号（昭和22年６月１日発行、定価15円）

編集人――鍛代利通
発行人――岡沢一夫
印刷人――楠末治
目次カット――小出楢重

• A・キュヴィリエ（河合亨訳）「ベルグソンと東洋思想」……2
• シャルル・エスェエンヌ（青柳瑞穂訳）「パリ画壇の現状　マチスからドゥロオネエまで」……8

□文化通信　政亜空路
• E・T「政治の危機」……10
• M・O「コルポラチスムの転機」……11
• M・O「フランスの革命」……12
• O・K「「白痴」について」……13
• S・R「映画女優自殺を企つ」……14

• ジョルジュ・シュミット（白井浩司訳）「実存主義批判―カトリック的観点に立ちて―」……15

□ガブリエル・マルセル「作家論」
•（新庄嘉章訳）「アンドレ・ジィドの『テーゼ』」……20
•（大西克和訳）「デュアメルと天国」……24
•（今日出海訳）「アンドレ・マルロオ」……27
•（權守操一訳）「ジャン・ジロードゥの遺書」……31

• マルセル・ティエボー（佐藤輝夫訳）「コメディ・フランセーズマリヴォーとモーリアックの成功」……35～39
• ジャン・テデスコ（北澤三郎訳）「ジューヴェの一人二役」……35～39
• ガブリエル・マルセル（權守操一訳）「文学賞」……40
• ヨゼフ・ローゲンドルフ（犬養道子訳）「ヨーロッパ文化の危機―形成過程の背後―」……43
• エドワール・テッセェ（新庄嘉章訳）「一九四〇年後の仏文壇」……48
• ピエール・フレデリックス（大岩誠訳）「ジョルジュ・ビドー」……58
•（※無署名）フランス語版目次……64

■第１巻第３・４合併号｛3｝（昭和22年９月１日発行、定価20円）

編集人――大森直道
発行人――岡沢一夫
印刷人――楠末治

カット――佐藤敬

- マルセル・ロベール（根津憲三訳）「サルトルの『密房』」……2
- フランシス・ユーレ（菱山修三訳）「フランス現代詩の展望」……12
- フェルナン・フィゼーン（根岸國孝訳）「独逸占領地区報告」……20
- ビア・レッドマン「大戦中の英国におけるフランスの文化活動」……29
- エドワール・テッセ（稲村耕雄訳）「進歩観念の論争について」……35

□INTERVIEWS ★最近の作家像★

- ポール・ギュート（山内義雄訳）「クローデル巴里に帰る」……40
- ジャン・クヴァル（新庄嘉章訳）「アンリ・ドウ・モンテルラン」……47

□航空路

- 鈴木力衛「実存主義は自己主義の私生児なりや？―エマニュエル・ムーニエ主催による公開討論会―」……51
- O・K「ブラッセル映画祭におけるフランス映画の勝利」……53
- ジャン・パトリック（鈴木力衛訳）「よっぱらった男」……55
- （※無署名）フランス語版目次……64

■第１巻第５号 ｛Numéro 4｝（昭和22年10月１日発行、定価25円）

編集人――大森直道
発行人――岡沢一夫
印刷人――楠末治
カット――村山密

- ジャン・ポール・サルトル（渡辺一夫訳）「大戦の終末」……2
- フランシス・ユーレ（菱山修三訳）「フランス現代詩の展望（承前）」……7
- ビア・レッドマン（小牧近江訳）「大戦下の英国におけるフランスの文化活動（承前）」……16
- ピェール・マンデス・フランス（小松清訳）「解放戦ルポルタージュ　自由フランスのために！（ロワシイ・アン・フランス）」……24

□書評

- （※無署名）「レヴィ・ブリュール『遺稿手帖』」……41
- （※無署名）「アンドレ・ジイドと無償の行為」……42
- ジャン・コクトオ（堀口大學訳）「はりつけ―1946年作―」……44

• ジャン・カスウ（神西清訳）「骸骨」……54

■第１巻第６・７合併号 ｛12月号｝（昭和22年12月１日発行、定価25円）

編集人――大森直道
発行人――岡沢一夫
印刷人――楠末治
カット――古茂田守介

• モオリス・メルロオ・ポンティ（吉田健一訳）「戦争の教訓」……2
• カール・ゲデラー（ジャック・ノブクール監修、大岩誠訳）「ドイツ国民に告ぐ――一九四四年七月二十日放送発表された革命政府の政綱――」……16
• ヂャック・ノーブクール（根岸國孝訳）「独逸第三帝国の反ナチ運動――ヒットラー暗殺計画の真相――」……24

□航空路

• F・ドウラン（白井浩司訳）「カフカに関するサルトルの講演」……33
• P・アンドルウ（森有正訳）「ベルグソンとパスカル（未刊の手紙）」……35
• F・ドウラン（AMO）「ソルボンヌに提出された最近の日本研究」……36
• オウリアン（佐藤朔訳）「ゴビノオ伯爵の未刊書簡」……38
• アンドレ・ヴィレル（鈴木力衛訳）「悪魔を買つた男」……44
• （堀口大學訳）「ジュウル　シュペルヴィエル散文詩」……50
• ピエール・アンドルウ（森有正訳）「ベルクソンとソレルにおける神話理論と」……58

■第２巻第１号 ｛新年号｝（昭和23年１月１日発行、定価28円）

編集人――松田一谷
発行人――岡沢一夫
印刷人――楠末治
表紙――山口長男
口絵――アンリ・マチス
カット――角浩

• （佐藤朔訳）「科学とヒューマニズム―ソルボンヌ大学に於ける討論会」……2

□マックス・ジャコブ追悼

• ジャン・ルスロ（北川冬彦訳）「暗殺された悔悛者―マツクス・ジヤコブに関する証言」……19
• ジャン・ルス編（北川冬彦訳）「マックス・ジャコブ未刊の書簡」

……30

• アンドレ・ジョルジ（堀口大學訳）「戦う操縦士　サン・テクジュペリ」……36

□航空路

• アンドレ・ボアザン（XAPY）「連邦主義運動の発展」……46

• G・アレクシンスキー（大岩誠訳）「有名人の面影―ニコラス二世★レニン★ゴルキー★ムッソリーニ」……49

• シュテファン・ツヴァイク（片山敏彦訳）「カルヴィンの権力掌握」……59

■第2巻第2号（二月号）（昭和23年2月1日発行、定価23円）

編集人――松田一谷

発行人――岡沢一夫

印刷人――楠末治

※特記事項：目次に「（A・F・P特約提供）」の注記あり。

• フランツ・カフカ（片山敏彦・松田穣共訳）「日記抄」……2

• ジョルジュ・ル・ブルトン（白井浩司訳）「フランツ　カフカ「支那の壁」について」……27

• （菱山修三訳）「散文詩　ジュリアン　グラック」……30

• アンリ・トロワイヤ（青柳瑞穂訳）「金牛宮（連載第一回）」……37

■第2巻第3号（昭和23年3月1日発行、定価28円）

編集人――松田一谷

発行人――岡沢一夫

印刷人――原喜平

表紙――山口長男

カット――村山密

• ジョルジュ・ブラン（串田孫一訳）「苦痛への同意について」……2

• クロード・モオリアック（河盛好藏訳）「マルロオ――反堕落文学論（1）」……14

• ドニ・マリヨン（小松清訳）「“希望”　アンドレ　マルロオの映画」……25

• （白井浩司訳）「アンドレ　マルロオ会見記」……34

□英米作家小論

• ロジェ・グルニエ（吉井俊二訳）「ヘンリイ・ミラー―あるいは汎神論への執念―」……40

• ラウル・レヴイ（高石治訳）「サロイヤンに就て―映画「人間喜劇」―」……45

• クロオド・モオリアック（佐藤朔訳）「アーサー・ケスラーの小説

—「ゼロと無限」と「スパルタコス」」……48

• アンリ・トロワイヤ（青柳瑞穂訳）「金牛宮（連載第二回）」……52

■第2巻第4号 {四月号}（昭和23年4月1日発行、定価30円）

編集人——松田一谷

発行人——岡沢一夫

印刷人——原喜平

※特記事項：目次に「（A・F・P特約提供）」の注記あり。また奥付の巻号表記が「第二巻第三號」と誤植。

• ジョルジュ・イザール（金澤誠訳）「歴史の革命的な歩みについて」……2

• （※無署名）「ソヴィエトにおけるフランス文学」……17～23

• アンリ・エル（吉井俊二訳）「ムールヂイの『エンリコ』について」……17～23

• ジョルジュ・ブラン（串田孫一訳）「苦痛への同意について（承前）」……24（※「註」の一部のみ、p.64に記載）

• ジョルジュ・エマニュエル・クランシェ「三人の現代詩人」……32

• アンドレ・ルウヴエィル（高石治訳）「フランス・パルチザンの歌」……42

• アンリ・トロワイヤ（吉井俊二訳）「アルベール　カミュの『カリギュラ』をめぐって」……44

• アンリ・トロワイヤ（青柳瑞穂訳）「金牛宮（連載第三回）」……54

■第2巻第5号 {五・六月合併號}（昭和23年6月1日発行、定価30円）

編集人——松田一谷

発行人——岡沢一夫

印刷人——原喜平

※特記事項：目次に「（AFP特約提供）」の注記あり。

• ロベェル・アロン（矢内原伊作訳）「歴史への還帰」……2

• アンドレ・シャンソン（杉捷夫訳）「小説の創造について」……12

• ロラン・ド・ルネヴィル（窪田啓作訳）「詩の問題」……20

• ミシェル・ドゥブレ（鈴木力衛訳）「リケ河畔の晩餐　★」……30

□書評——アラゴン／ジィド／モオリアック

• ドミニック・オリ「アラゴン「オレリアン」」……40

• ガブリエル・マルセル「ジィド

「日記抄」（一九三九年―一九四二年）」……42
- マルセル・ブリオン「フランソアモオリアック「聖女マルグリットド　コルトンヌ」」……44

- アンリ・トロワイヤ（青柳瑞穂訳）「金牛宮（連載第四回）」……46

■第2巻第6号（昭和23年7月1日発行、定価30円）
編集人――松田一谷
発行人――岡沢一夫
印刷人――原喜平

- ジャック・シャゼル（佐藤朔訳）「ジロドウの戯曲」……2
- クローディヌ・ショネエ（窪田啓作訳）「詩的行為及び言語について」……13
- クララ・マルロオ（神西清訳）「愛についてのささやかな覚書」……22

□アンリ　トロワイヤ小論（高石治訳）
- R・ド・ブラガアル「《金牛宮》」……26
- J・バサン「《プーシュキン》」……28
- （※無署名）「《生ける人々》」……30
- A・ピエラル「《博愛家より赤毛の女に》」……32

- ミッシェル・ドゥブレ（鈴木力衛訳）「リケ河畔の晩餐　★★」……34
- アンリ・トロワイヤ（青柳瑞穂訳）「金牛宮（連載第五回）」……44

■第2巻第7号 ｛八月号｝（昭和23年8月1日発行、定価35円）
編集人――木村徳三
発行人――岡沢一夫
印刷人――原喜平
※特記事項：目次に「（A.F.P. 特約提供）」の注記あり。

- カール・ヤスパース（ベルトラン・ムーラール仏訳、矢内原伊作訳）「我等に罪ありや――ドイツの自己批判」……2
- ロベール・アロン（加藤周一訳）「ドイツの異教主義」……17
- キク・ヤマタ（鈴木力衛訳）「コレットの秘密」……24

□シモオヌ・ド・ボオヴォアルの作品（永戸多喜雄訳）
- シャンロミス「『ピリュスとシネアス』」……39
- ドウシア・エルガス「『他人の血』」……41

- ジャン・バッサン「『余計な人々』」……43

- アンリ・トロワイヤ（青柳瑞穂訳）「金牛宮（連載第六回）」……46

■第2巻第8号〔九月号〕（昭和23年9月1日発行、定価35円）

編集人――木村徳三

発行人――岡沢一夫

印刷人――原喜平

※特記事項：目次に「（AFP 特約提供）」の注記あり。

- ベルナルト・グレートゥイゼン（平岡昇訳）「ルソーの自由観」……2
- ロベエル・ケンプ（高石治訳）「サルトルの戯曲《汚れた手》について」……16
- エミイル・アンリオ（佐藤朔訳）「ジャムとジイド」……20
- ドナルド・リッチイ（吉井俊二訳）「アメリカに於けるジイドの影響」……24

□（※特集名なし、新庄嘉章訳）

- ロベール・カンテル「現存するモーリス・バレス」……28
- ジベール・シコー「バレスの『手帖』」……36

- ジャン・ラクロワ（森有正訳）「ヨーロッパ精神」……41
- ジャン・ラクロワ（森有正訳）「判断の哲学者アラン」……44
- シャミイヌ（岡田眞吉訳）「二つの『イヴアン雷帝』」……48
- アンリ・トロワイヤ（青柳瑞穂訳）「金牛宮（完結）」……52

■第2巻第9号〔十・十一月合併号〕（昭和23年12月1日発行、定価50円）

編集人――木村徳三

発行人――岡沢一夫

印刷人――原喜平

※特記事項：目次に「（AFP 特約提供）」の注記あり。

- J・キュイジニエ、ベルナール・デュマ、ジャン・ルイ・デュマ、ジャン・プティ、J・J・リニエリ、ジョルジュ・ヴォリ共著（三宅徳嘉、高橋安光、川村克己、池田一朗共訳）「自由の道程」……2
- アーサー・ケスラー（白井浩司訳）「自由の精神」……28
- ジヤン・カッスー（加藤周一訳）「一つの自由と多くの自由」……39
- ジョルジュ・イザール（三宅徳嘉訳）「人身保護法」……42
- アンドレ・シャンソン（窪田啓作

訳）「爆撃―シャンソン少佐の軍用手帳より」……46
- モーリス・ベツ（川口篤訳）「戦争詩人アポリネール」……48
- アルマン・オーグ（白井健三郎訳）「シュールレアリスムの永続性」……61
- ロラン・ド・ルネヴィル（窪田啓作訳）「超現実主義瞥見」……69
- クロオド・モオリアック（佐藤朔訳）「超現実主義の神秘―アンドレ　ブルトン論」……74

〈付記〉

- 資料の引用に際し仮名遣いはそのままとし、旧字体は新字体に改めた。また引用部の傍線は稿者による。
- 『ヨーロッパ』総目次の作成においては、雑誌の現物に基づいて目次データを採録することを旨とした。記事タイトル記載の際には、仮名遣いはそのままとし、旧字体は新字体に改めた。なお目次データの採録にあたっては、以下の館所蔵の資料を閲覧した。

第１巻第１号および第２巻第９号：公益財団法人日本近代文学館（東京都目黒区）
第１巻第２号～第２巻第８号：関西大学総合図書館（大阪府吹田市）

注

1）　川端康成「貸本店」（『日本読書新聞』第332号、1945年12月20日）、引用は三十七巻本『川端康成全集第二十七巻』（新潮社、1982年３月）p. 383.
2）　川端康成「貸本店」（『日本読書新聞』第332号、1945年12月20日）、引用は三十七巻本『川端康成全集第二十七巻』（新潮社、1982年３月）p. 385.
3）　高見順「鎌倉文庫について」（『高見順全集第十七巻』勁草書房、1973年５月）p. 398.
4）　木村徳三「『人間』編集長として――木村徳三氏にきく――」（『彷書月刊』第２巻第８号、弘隆社、1986年７月）p. 9.
5）　巌谷大四「華やかな文学の復興（II・「戦後日本」文壇史）」（巌谷大四『私版昭和文壇史』虎見書房、1968年11月）p. 81.
6）（※無署名）「鎌倉文庫出版リスト」（小田切進監修『鎌倉文庫と文芸雑誌「人間」』大空社、1993年３月）pp. 284-294.

7）　土屋定夫「〈研究ノート〉鎌倉文庫の出版物と参考文献について」（『郷土神奈川』第38号、神奈川県立図書館、2000年）pp. 30-38.

8）　尾崎名津子「鎌倉文庫の単行本出版目録」（『跨境　日本語文学研究』第11号、高麗大学校日本研究センター、2021年４月）pp. 235-252.

9）（※無署名）「Ⅳ「人間」総目次」（小田切進監修『鎌倉文庫と文芸雑誌「人間」』大空社、1993年３月）pp. 176-282.

10）O「資料『文芸往来』総目次（１）」（『彷書月刊』第２巻第８号、弘隆社、1986年７月）pp. 14-16.、岡野幸江「資料『文芸往来』総目次（２）」（『彷書月刊』第２巻第９号、弘隆社、1986年８月）pp. 21-22.

11）（※無署名）「編集後記」（『ヨーロッパ』第１巻第１号、鎌倉文庫、1947年５月）p. 64.

12）川端康成「独影自命（十三）」（1952年３月12日付「あとがき」。十六巻本『川端康成全集第十三巻』新潮社、1952年３月）、引用は三十七巻本『川端康成全集第三十三巻』（新潮社、1982年５月）pp. 503-504.

13）本稿における「連合国軍最高司令部よりの、出版物、映画、写真及びニュースの輸入等に関する回状の件」、および「別紙　二」条文の引用は、宮田昇『翻訳権の戦後史』（みすず書房、1999年２月）所収、邦訳条文「D　回状〔全文〕」（pp. 400-407.）に拠る。

14）宮田昇「第二章　占領下「五〇年フィクション」による統制」（宮田昇『翻訳権の戦後史』みすず書房、1999年２月）p. 53.

15）（※無署名）「ヨーロッパ」（紅野敏郎、栗坪良樹、保昌正夫、小野寺凡『展望戦後雑誌』河出書房新社、昭和52年６月）pp. 169-170.

16）稲田三吉「ヨーロッパ」（日本近代文学館、小田切進編『日本近代文学大事典第五巻』講談社、1977年11月）p. 445.

17）フランス通信社（AFP 通信社、Agence France-Presse）の前身となったのは、1835年創業のアヴァス通信社（Agence Havas）である。アヴァスは1940年のナチス・ドイツのフランス侵攻によるフランスの降伏と、ヴィシー政権発足に伴って解散に追い込まれたが、1944年のパリ解放後に旧アヴァスの施設や要員を引き継ぎ、フランス通信社が発足した。フランス通信社は発足当初、フランス政府が任命した総支配人と理事２名によって運営され、運営予算の過半が国庫から拠出され、法令によってその地位が定められるという、事実上の「国有」通信社であった。人事面でフランス首脳部からの圧力がかかったこともあったとされており、小糸忠吾は「第Ⅱ部　誇り高きフランス」（小糸忠吾『マスコミシリーズ５　世界の新聞・通信社――激動の第三世界と大国のマスメディア』理想出版社、1980年７月）の中で、1950年代の例に言及しながら「フランスでは政治が報道に介入する傾向がある。そのような国で、財政的に政府依存の大きい AFP が、社長を選ぶさい、大統領から圧力がかかっても、あながち不思議ではあるまい」（p. 143.）と評している。

参考文献

- 巌谷大四『私版昭和文壇史』（虎見書房、1968年11月）
- 小阪部元秀「鎌倉文庫の活動と衰退」（『國文學　解釋と鑑賞（７月臨時増刊号　文壇史事典）』至文堂、1972年７月、pp. 152-153.）
- 高見順「鎌倉文庫について」（『高見順全集第十七巻』勁草書房、1973年５月）
- （※無署名）「ヨーロッパ」（紅野敏郎、栗坪良樹、保昌正夫、小野寺凡『展望　戦後雑誌』河出書房新社、1977年６月、pp. 169-170.）
- 巌谷大四「人間」（日本近代文学館、小田切進編『日本近代文学大事典　第五巻』講談社、1977年11月、pp. 318-319.）
- 稲田三吉「ヨーロッパ」（日本近代文学館、小田切進編『日本近代文学大事典　第五巻』講談社、1977年11月、p.445.）
- 小糸忠吾『マスコミシリーズ５　世界の新聞・通信社――激動の第三世界と大国のマスメディア』（理想出版社、1980年７月）
- 川端康成「独影自命（十三）」（1952年３月12日付。十六巻本『川端康成全集第十三巻』新潮社、1952年３月）、三十七巻本『川端康成全集第三十三巻』（新潮社、1982年５月）所収。
- 『彷書月刊（特集・鎌倉文庫）』（第２巻第８号、弘隆社、1986年７月）
- 小田切進監修『鎌倉文庫と文芸雑誌「人間」』（大空社、1993年３月）
- 宮田昇『翻訳権の戦後史』（みすず書房、1999年２月）
- 土屋定夫「〈研究ノート〉鎌倉文庫の出版物と参考文献について」（『郷土神奈川』第38号、神奈川県立図書館、2000年）
- 横浜国際関係史研究会、横浜開港資料館編『GHQ 情報課長ドン・ブラウンとその時代　昭和の日本とアメリカ』（日本経済評論社、2009年３月）
- 尾崎名津子「鎌倉文庫の単行本出版目録」（『跨境　日本語文学研究』第11号、高麗大学校日本研究センター、2021年４月）